

# Janne Tateno Violin Recital 2025

ヤンネ館野 ヴァイオリン・リサイタル 2025

2025年1月16日(木)  
東京文化会館小ホール  
19:00開演  
7:00p.m. Thursday, January 16, 2025  
at Tokyo Bunkakaikan Recital Hall

主催: ジャパン・アーツ  
後援: フィンランド大使館  
協力: 館野泉ファンクラブ



## PROFILE



Janne Tateno  
Violin

### ヤンネ館野(ヴァイオリン)

1975年ヘルシンキ生まれ。ヘルシンキ音楽院にてシルッカ・クーラ、オルガ・パルホメンコ、ルーズベルト大学シカゴ芸術大学音楽院で森悠子の各氏に師事。室内楽を森悠子、イエルツィ・ゲベルト各氏に師事。オウルンサロ音楽祭(フィンランド)に、オーケストラのコンサートマスター、室内楽奏者、バロックやタンゴ奏者として10年にわたり出演。シカゴでユーシア弦楽四重奏団(01年インディアナでのフィッシュ国際室内楽コンクール1位)の第2ヴァイオリン奏者として活動。05年丹波の森国際音楽祭シューベルトティアードたんばのメインアーティストとして招聘される。08年山形交響楽団第2ヴァイオリン首席奏者になる。11年、22年東京文化会館にてリサイタルを行う。15年ヘルシンキにてウィルヘルム・ケンプのヴァイオリンコンチェルトを演奏。ソリストとして山形交響楽団と12年にモーツァルト、20年にシベリウスのヴァイオリンコンチェルトを共演。20~22年に相馬泉美氏と、22~24年には大宅さおり氏とベートーヴェンのヴァイオリンソナタ全曲演奏会を完遂。23~24年相馬泉美氏とシューマンとブラームスのヴァイオリンソナタ全曲演奏会を完遂。24年南フランスにてセヴラック音楽祭に出演。これまでに京都市交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、川崎室内管弦楽団など多数のオーケストラに第2ヴァイオリン客演首席奏者として出演。またソリストとして大阪チェンバーオーケストラ、東京エラート室内管弦楽団、山形交響楽団、長岡京室内アンサンブル、東京ユヴェントス・フィルハーモニー、ラ・テンペスタ室内管弦楽団と共演。現在ヘルシンキを拠点とするラ・テンペスタ室内管弦楽団のコンサートマスターと音楽監督を務める他、山形交響楽団第2ヴァイオリン首席奏者、森悠子主宰長岡京室内アンサンブルのメンバーとして、またバロックヴァイオリン演奏、アルゼンチンタンゴ演奏など幅広い活動を展開。横浜でアンサンブルMIDORIを結成し自主企画室内楽コンサートシリーズを続ける等プロデュースも行う。録音CD『Janne Plays Sibelius』『Monologo via Corda ~独絃哀歌』。ホームページ: jannetatenos.com



Ryoji Ariyoshi  
Piano

### 有吉亮治(ピアノ)

東京藝術大学卒業後、文化庁新進芸術家海外研修員及びローム ミュージックファンデーション奨学生としてジュネーヴ高等音楽院に留学。日本音楽コンクール第1位をはじめ、カントゥ国際コンクールなど国内外のコンクールに入賞。これまでに清水嘉子、谷康子、田辺緑、迫昭嘉、パスカル・ドゥヴァイヨン、ジャン＝クロード・ペヌティエの各氏に師事。在学中より日本ショパン協会主催例会リサイタルをはじめヨーロッパ各地、中東ヨルダンなど国内外で演奏活動を行うほか、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、東京交響楽団などと共演。室内楽においてはラ・フォル・ジュルネ、東京・春・音楽祭、ヴィオラスペースなどに出演し著名演奏家と共演。またピティナ、全日本学生音楽コンクール、日本音楽コンクールなどの審査員も務める。現在、桐朋学園大学音楽学部准教授。

Janne Tateno Violin Recital 2025



## ESSAY

昨夏ヘルシンキの実家で、1975年の音楽の友Music Calenderを見つけた。1月私が生まれた日に、私の誕生の事が記されていて、一瞬で50年前の情景が目の前に現れた。生れる前から音楽の中で生きてきた。ジャンルを問わず音楽は好きだ。そして寄り道や回り道の末に音楽家の道を選んだ。素晴らしい先生方、大切な仲間、温かいサポーター、貴重なチャンス、面白い音楽それぞれとの出逢いが、今の私を作っている。感謝の言葉は尽きない。

数年前から50歳の時にリサイタルをしようと考え、プログラムも少しずつ考えていた。私は何事も決定することに時間がかかるが、今回のプログラムはスムーズに決まった。やりたい気持ちが溢れていたように感じる。

シューベルトは、病や貧困のため大変な人生を送った孤独な人。あちらの世界を見たような、天国と地獄のどちらも知っているような、独特の世界を持っている。優美で神秘的なこのソナタは、難曲だが何度も挑戦したくなる。有吉亮治さんのシューベルトのCDを聴いて、いつか一緒に演奏できることを願っていた。

ヤナーチェクはどの作曲家にも似ていないところ、そして、ヨーロッパとアジアのどちらにも通じるところが特徴のひとつ。ドラマティックだけれど、切ないシューベルトのソナタと、激しさはあるけれど、内向的で親密なヤナーチェクのソナタ。2つの世界観は似ていてとても魅力的。人の内面を語るような2曲を並べて弾くことにした。

ヒナステラのパンペアーナ第1番は、シカゴ留学時に父からの土産で楽譜を入手、学生リサイタルで弾いた思い出

フランツ・シューベルトの肖像画。1825年、ヨハン・ハインリッヒ・ラウアーによって描かれた。

### PROGRAM

**フランツ・シューベルト:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ(ソナチネ) 第2番 イ短調 D385 Op.137-2**
Franz Schubert: Sonata (Sonatina) for Violin and Piano No.2 in A Minor, D385, Op.137-2
I . Allegro moderato
II . Andante
III . Menuetto
IV . Allegro

**レオシュ・ヤナーチェク:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ**
Leoš Janáček: Sonata for Violin & Piano
I . Con moto
II . Ballada
III . Allegretto
IV . Adagio

**アルベルト・ヒナステラ:パンペアーナ第1番 Op.16**
Alberto Ginastera: Pampeana No.1, Op.16

**エドヴァルド・グリーグ:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第3番 ハ短調 Op.45**
Edvard Grieg: Sonata No.3 for Violin and Piano in C Minor, Op.45
I . Allegro molto ed appassionato
II . Allegretto espressivo alla Romanza
III . Allegro animato

の曲。アルゼンチンの草原地帯パンパと、そこで牛などの世話をする gaucho を表現している。激しいエスプリ、厳しい生活など南米の文化が伝われば嬉しい。私はアルゼンチン・タンゴやピアソラが好きで度々演奏するが、ヒナステラは、ピアソラの先生であったことも興味深い。

10代の頃、父のグリーグ作品の録音セッションの時に譜めくりを担当し、グリーグの世界を存分に浴び、すっかり魅了された。ヴァイオリンソナタ第3番はグリーグのソナタの中では一番心揺さぶられる美しい曲。50歳のリサイタルでは一番心揺さぶられる美しい曲。50歳のリサイタルでやりたいと思っていた。美しい満天の星空や、小さな小川が突如として山の頂上から降り注ぐ滝になる壮大な景色。森の中でトロールたちが戯れている、不可思議な世界へ誘われるような妖しい感覚を表現しているようだ。フィンランドとノルウェーとは似たようなところがあるが、フィンランドは平地で湖が多く、ノルウェーは海と山のコントラストが激しい。ノルウェーの大自然が生んだグリーグの世界。

有吉亮治さんとは呼吸が合い、一緒にハーモニーが作りやすい。和声感が素晴らしい。会話なしでもハモれる。有吉さんも自分のサウンドを持っているのが伝わってくる。我々2人のケミストリー(化学反応)が面白いので、それを楽しんでいただきたい。

この先も新しいことに挑戦し、新しい世界を見つけ、クリエイティブに、もっともっと進化し続けていきたい。次の半世紀に向けて一歩、踏み出す。

ヤンネ館野 *J. Tanaka*

#### PROGRAM NOTES

**フランツ・シューベルト:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ(ソナチネ) 第2番 イ短調 D385 Op.137-2 (1816)**

フランツ・シューベルト(1797-1828)が生きた18世紀後半から19世紀前半という時代は、音楽的のみならずヨーロッパにおいて大きな変革を見せた時代であった。社会的には1789年のフランス革命をきっかけに、シューベルトが世に出る頃には社会構造の中心が貴族から市民へと大転換を果たしていた。さらに1815年より始まるウィーン体制によって、深刻な内容や政治的な連想が働く作品は忌避されることとなった。演奏の場は貴族たちの壮麗な演奏会場から、市民たちが主催するホールや家庭的なサロンへと様変わりし、求められる音楽も娯楽性の高いオペラや室内楽的な作品へと移っていった。そうした中でシューベルトは時代が求める音楽の形とも言えるドイツリートを芸術的な次元にまで高めたことで世に知られた作曲家と言えるだろう。

シューベルトはその31年という短い生涯において、600曲ものリートを生み出したが、しかしその傍らで未完のものも含めて21曲のピアノソナタ、15曲の弦楽四重奏曲ほか、膨大な数の器楽作品も残している。その多くがサロンのような個人的な集いの中で演奏されたものであり、**ヴァイオリンとピアノのためのソナタ(ソナチネ) 第2番 イ短調**もそうした中のひとつである。この分野においてシューベルトは、自身のリートで培った深い感情表現を以って、ベートヴェンが打ち立てた高い壁となってそびえている前時代のウィーン古典派に対する挑戦とも言える姿勢を見せているのである。4つの楽章からなるこの作品は、第一楽章を哀愁を帯びたピアノの悲痛な旋律で始まる。ここではシューベルトの特徴とも言える予想を超えた転調が実に自然に組み込まれている。まるで歌曲を思わせる優雅な旋律に支えられた第二楽章を経ると、第三楽章のメヌエットは通常では選ばれることのない関係調であるニ短調が配置されている。終楽章のアレグロは Rond 形式で書かれており、物憂げな主題の間にヴィルトゥオーゾ的な三連符のパッセージが楽器間で交互に挿入される。

なお、1816年に書かれた本作は、第1番ニ長調(D.384、作品137-1)、第3番ト短調(D.408、作品137-3)と共に同じ時期にまとめて書かれており、それぞれにIからIIIまで通し番号を振っていることから、関連性のある一連の作品であると考えていた。シューベルトの死後10年の後にディアベリがこのソナタを出版するにあたり、容易に取り組めるような印象を与えるために「ソナチネ」の名を与えたようだが、とりわけ第2番・第3番においてはソナタと呼ぶにふさわしい規模と内容を備えている。

**レオシュ・ヤナーチェク:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ (1914-21)**

スメタナ、ドヴォルザークに並び、レオシュ・ヤナーチェク(1854-1928)もチェコを代表する作曲家のひとりである。前者2名がロマン主義的な語法の中で自国の響きを紡ぎ出したのに対して、ヤナーチェクは彼らとほぼ同世代にもかかわらず(スメタナとは30歳差、ドヴォルザークとは13歳差)、外に類例を見ない、時代を超越した全く独自の音楽を切り開いた作曲家である。モラヴィア(現在のチェコ東部)に生を受けたヤナーチェクは、自身の生地の言葉やフォークロアを極めて重視していた。彼は様々な分野において作品を残したが、これらが最も顕著に表れたものはオペラであり、とりわけ《イェヌーフア》と《カーチャ・カバノヴァー》は同時に彼の代表作となった。

**ヴァイオリンとピアノのためのソナタ**は1914年ごろより作曲が始まり、幾度とない改訂が施されながら1921年に最終版が完成した、現存するヤナーチェクの唯一のヴァイオリンソナタである(ウィーン及びライプツィヒ留学時代に2つのソナタを書いているが、いずれも紛失)。全四楽章より構成されており、第一楽章は確かな期待に満ちた堂々たる音楽であり、ツィンバロン(ピアノ弦を直接叩く中欧・東欧の民族楽器)を模したような伴奏に乗せてスラブ的な幅広い旋律が舞う。夢見のような第二楽章の〈バラード〉を経ると、第三楽章では活気ある舞踏のリズムが聴こえてくるが、中間部には朗々とした歌が広がる。終楽章ではピアノによる緩やかな子守歌のような旋律と、神経質なヴァイオリンのつぶやきが断続的に繰り返される。やがて熱を帯びたヴァイオリンのコラールとピアノのトレモロへと引き継がれるが、次第にゆっくりと消えゆくように音楽を閉じる。

本作は1914に勃発した第一次世界大戦にロシアが参戦したことに突き動かされて作曲された。当時のモラヴィアはオーストリア＝ハンガリー帝国の一部であり、民族的開放運動である汎スラブ主義の熱心な賛同者であったヤナーチェクは、ロシアの勝利とそれに伴う自身の民族的独立への期待とともに高揚感をもってこれを歓迎しており、その感情を本作に刻み込んだとされている。事実それを感じさせる箇所が本作には多く感じられるが、作曲における切欠は出発地点でしかないことを、本作からきこえる豊かなイマジネーションそのものが教えてくれているよう思う。

**アルベルト・ヒナステラ:《パンペアーナ第1番》Op.16 (1947)**

アルベルト・ヒナステラ(1916-1983)はその生地アルゼンチン、並びにラテンアメリカを代表する作曲家である。バレエ音楽《エスタンシア》やハーブ協奏曲などに代表されるその音楽のスタイルは今日において、その地を代表するものとして認識されていると言えるだろう。情熱的なリズムや打ち付けるような激しい和音などが特徴的な彼の音楽は、当時の現代的な作曲技法に加え、南米及びアルゼンチンの民族音楽の要素を結びつけたものと言えるが、後者の多くはブエノスアイレスの2割を占める大草原パンパに住む民族を指す、gaucho たちが持つ文化にルーツを持つものである。gaucho とは17世紀から19世紀にかけて南米に暮らしていたスペイン人と原住民の混血民族である。ヒナステラを含む、アルゼンチンにおけるナショナリズム的な潮流は、19世紀中ごろよりアルゼンチン政府が行った積極的な入植により、粋のアルゼンチン人が特定の移民グループに対して疑念を持ちはじめたことに起因している。移民である芸術家たちは混血民族であるgaucho に目を向けることで、自らの民族的正当性を主張したのである。

8分ほどの長さを持つ**《パンペアーナ(パンパの大草原) 第1番》**はそのタイトルが示すように、上記のgaucho が住むパンパ地方の情景を描いたものである。冒頭に掻き鳴らされるピアノの和音はまさにgaucho が持つギターの開放弦の響きであり、この和音はヒナステラの生涯を通して使用される象徴的な響きと言えるだろう。ヴァイオリンが高らかに歌い上げる前半部分に対し、楽曲後半に見られるエネルギーッシュなリズムも、gaucho の男性が躍るマランボという踊りに基づくものである。本作が書かれた1947年は、ヒナステラがアメリカでアーロン・コーブランドに学んだ直後に当たる。これにより彼は明らかに自国の文化的素材を独自の音楽語法へと昇華する手法を身に着けたと言えるだろう。なお、本作は「ヴァイオリンとピアノのためのラブソディ」との副題が添えられており、自由な構成と劇的な展開が本作の野趣豊かな性格をさらに強めている。

**エドヴァルド・グリーグ:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第3番 ハ短調 Op.45 (1886-87)**

エドヴァルド・グリーグ(1843-1907)は当時のノルウェーにおいて次第に高まりを見せていた民族主義的運動に深く呼応し、民族音楽の文化を融合させることで自国の音楽界に独自の声を与えた英雄的存在のひとりである。だが、晩年に至り自身が告白しているように、彼は民族的であることを第一に標榜したのではなく、民族性を超えて「普遍的・個性的なもの」を追求していたことを忘れてはならない。そしてその発展の途上には困難も横たわっていた。彼は若き日に最先端の学びを提供していたライプツィヒ音楽院に留学し、当時の最上級の音楽教育を受けたが、グリーグはその時代を苦々しく回想している。ソナタ形式に代表されるような、中央ヨーロッパにおける伝統的なクラシック音楽の潮流は自身には不向きだと痛感していた。彼の唯一の交響曲(1864年完成)はその完成度への不満からスコアには「決して演奏してはならない」と書き残し、今日では彼の代名詞とも言えるピアノ協奏曲ですら幾度とない改訂を施している。得てしてグリーグは小規模な作品を得意とするミニチュアリストとしての性格を強めていった。事実として、彼の代表作として挙げられるのは、先のピアノ協奏曲を別とすれば、劇音楽《ペール・ギュント》ほか、ピアノのための《抒情小曲集》に代表される小品の数々なのである。

そうした中で、彼が残した3つのヴァイオリンソナタは、1900年に56歳に至ったグリーグが「私の最高傑作のひとつである」と語るように、特別な位置付けの作品であると言える。とりわけ**ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第3番**は彼の普遍的、民族的、個人的な要素が、かつて不得手とされたソナタという大規模形式の中に融合した、グリーグのひとつの到達点と見做すことができるだろう。本作は画家フランツ・フォン・レンバッハに捧げられており、1886年の秋から冬にかけてグリーグの別荘であるトルドルハウゲンで完成した。全三楽章で構成されており、深い情念と劇的な激しさに満ちた第一楽章に続き、グリーグ屈指の美しさを誇る第二楽章の「ロマンツァ」を経ると、力強い舞踏のリズムを感じさせる終楽章へと流れ込み、やがてハ長調による終結部へと至る。それはかつての作曲家としての目指すべき境地に達したグリーグの歓喜の声なのかもしれない。